海の研究（Oceanography in Japan），**30**(5)，85－86，2021，doi: 10.5928/kaiyou.30.5_85
特集「海洋学の 10 年展望 2021」（日本海洋学会 将来構想）

— 特 集 —

海洋学の 10 年展望 2021 *

序　文**

日本海洋学会では 2020 年度，将来構想委員会の下に「研究に関する将来構想ワーキンググループ」（以下，WG）を作り，1 年間をかけて将来構想の検討を行った。その結果をここに，7 本の総説論文の形で発表する。

学会が前回，10 年後を見据えて研究の将来構想を検討したのは，2012 年度である（花輪・津田，2013）。その目的の 1 つは，2010 年に始まった日本学術会議「学術の大型研究計画に関するマスタープラン」への対応にあり，学会では将来構想の検討結果に基づいて「マスタープラン 2014」への申請を行った。それから 5 年以上が経過し，2019 年度に就任した神田 穣太会長，伊藤 進一副会長から，「マスタープラン 2023」，国連「持続可能な開発目標」，「国連海洋科学の 10 年」などを背景に，研究に関する将来構想の検討を改めて実施する方針が示された。そのとりまとめとして，岡 英太郎（東京大学），高橋 一生（東京大学）の両幹事と西岡 純会員（北海道大学）の 3 名が指名され，以下の会員 12 名を加えた 15 名で WG を結成した。

相木 秀則（名古屋大学），岩本 洋子（広島大学），大林 由美子（愛媛大学），岡 顕（東京大学），川合 美千代（東京海洋大学），木田 新一郎（九州大学），栗原 晴子（琉球大学），近藤 能子（長崎大学），土井 威志（海洋研究開発機構），橋濱 史典（東京海洋大学），平井 惇也（東京大学），安中 さやか（海洋研究開発機構，現東北大学）

WG のミッションは，海洋学会を中心に日本の海洋コミュニティが今後 10 年程度の間に何を明らかにしていくべきか，またそのために必要な研究や研究基盤は何かを議論することである。2020 年 6 月の結成以降，オンライン会合を重ね，今回の将来構想の検討を以下の方針のもとに進めることを決めた。

- WG の第一の活動として，各研究者が今大事だと思うことを自由に挙げる，サイエンスベースの将来構想をまとめ，結果を前回同様，「海の研究」に総説論文として発表する（「マスタープラン 2023」や「国連海洋科学の 10 年」を直接の出口とはしない。それらに対しては，将来構想の結果の中から適宜切り出して，対応する）
- 前回は物理，化学，生物の 3 つのグループに分かれて将来構想の議論を行った（岡ら，2013；神田ら，2013；浜崎ら，2013）が，今回は物化生合同で行い，分野横断型の研究に重点を置く
- 今回は WG の下に 6 つの海域別グループ（沿岸域，熱帯域，中緯度，極域，深層，大気海洋境界）をつくり，各グループにおいて将来構想の議論を行う。また，海域別グループに入りきらない共通テーマに関して，「新たな手法と問題」グループをつくる

2020年度後半には上記7グループを，WG内外の30代後半から40代前半を中心とする会員・非会員で組織し（総勢42名。前回の将来構想から9割以上のメンバーが交替した），将来構想の議論を行い，その結果を総説論文の形にまとめた。これらの草稿を2021年4月に順次公開し，5月末を締切として会員・非会員からのパブリックコメントを募集した。そして，24名から頂いた28件のコメントを参考に原稿への加筆・修正を行い，修正稿を7月に「海の研究」に投稿した。査読の過程で，グループによってはさらに大幅な加筆を行った。

一連の過程で最も時間が費やされたのは，各グループ（海域）においてどのように物化生を融合した研究ができるかという，執筆の前段階の議論である。海域間でこれまでの分野横断連携の達成度に差があるため，議論のベクトルを揃えるのが容易でないグループもあったことと推察するが，各グループのとりまとめ（筆頭著者）と著者たちの努力，またパブリックコメントを通じた会員・非会員からのインプットのお蔭で，非常に読み応えのある将来構想が完成した。近い将来，今回の将来構想を起点として分野横断型プロジェクトが生まれれば，それに勝る喜びはない。

もう一点強調しておきたいのは，今回の将来構想の検討がWGでの議論に基づき，

●執筆者が自由な発想に基づき，尖った面白いものを書く
●全てのトピックを網羅的にカバーすることはしない
●過去のレビューよりは今後の発展に重点を置く

をモットーに進められたということである。今回の将来構想に取り上げられていないテーマが重要でない，ということは全くないので，その点をご理解頂きたい。また，とりまとめとしては，10年後，20年後の海洋学を担うであろう20代～30代前半の若手がこの将来構想を教科書的に読むのではなく，「10年後に自分がもっといいものを書いてみせる」という気概をもって読んでくれることを望んでいる。

岡 英太郎†
（特集世話人）

参考

花輪公雄・津田敦（2013）：「海洋学の10年展望」発刊に寄せて．海の研究，**22**, 187-189.

岡英太郎・磯辺篤彦・市川香・升本順夫・須賀利雄・川合義美・大島慶一郎・島田浩二・羽角博康・見延庄士郎・早稲田卓爾・岩坂直人・河宮未知生・伊藤幸彦・久保田雅久・中野俊也・日比谷紀之・寄高博行（2013）：海洋学の10年展望（Ⅰ）―日本海洋学会将来構想委員会物理サブグループの議論から―．海の研究，**22**, 191-218.

神田穣太・石井雅男・小川浩史・小埜恒夫・小畑元・川合美千代・鈴村昌弘・本多牧生・山下洋平・渡邉豊（2013）：海洋学の10年展望（Ⅱ）―日本海洋学会将来構想委員会化学サブグループの議論から―．海の研究，**22**, 219-251.

浜崎恒二・石坂丞二・齊藤宏明・杉崎宏哉・鈴木光次・高橋一生・千葉早苗（2013）：海洋学の10年展望（Ⅲ）―日本海洋学会将来構想委員会生物サブグループの議論から―．海の研究，**22**, 253-272.

* 著作権：日本海洋学会，2021年

** Preface of the special section “Decadal Vision in Oceanography 2021”. Author. Eitarou Oka (U. Tokyo).

† 東京大学 大気海洋研究所
〒277－8564 千葉県柏市柏の葉5－1－5